

雪と沈丁花

琴

〴〵ピンクのいろと もどってくる〴〵

ようやくそれを聴けたから私はずっと、探し続けてきた――

昨夜降った雪は、一気に二十センチも積もった。三月も終わり近い標高千メートルの地。朝の息はまだまだ白い。でも湖水は動きだし、空気は春色を待つ。風はぬるみ、そわそわとくすぶりたい。時期遅れの雪だけがはにかみ、どこか照れくさそう。凍てつく日は青白い色が、春陽にまとわれて違うきらめきを放っているもの。

平地では梅、桃、菜の花と花リレーが忙しく続いているらしい。そしていよいよ、次の季節への扉を大きく開ける、たおやかな花が咲く。沈丁花。その小さな花卉から、静かに香りを立ち昇らせる花。育った家の玄関先にも毎年咲くが、この時節以外は気を留められることもない低木である。けれど私は、厳寒の一月、冷たい二月、少し温む三月と気持ち募らせながら、漂う香りを想像している。祖母も母も好きだった、そして私も大好きな、穏やかならぬ香り。そのふくいくとした匂いに顔をそっと寄せ、身を低くする。この時期までようやく来られた、巡る季節を再び迎えられたと手を組み合わせ、早く花の招きを受けたい。

沈丁花だけでなく、花たちはなぜ、視覚的な美しさ以上に香ることに懸命なのだろう。きつと、香りという見えない働きにこそ、美しさを込められるからではないのか。美は秘めなくてはならない。とりわけ、花の美は。「かなしみがないと美は生まれない」と、あの方は言った。しゅり神山から見下ろす春の海、その空を、れんげの色〴〵と感じた人。

もしかして……。その色は、私の好む花の香氣とも潔く結ばれるのでは……。

探し続けた。そして、ようやく辿り着けたのかもしれない。

キミの〴〵ピンクのいろ〴〵、それは常世の国を包む花の香りのこと、美しみのいろのこと。美しみいろは、溶かし込まれる場所をいつも求めている。な

らば、

「どうか、春、花をたよりに、こちらへ戻って来てはくれませんか」

ああ、まず、謝らなければならぬ。あの日、長くいられないとわかってから私のかけがえないのものからキミを除こうとした。キミなき後におそわれる空っぽの時間がこわかったから。逃げたかったから。でも、逃れようもありませんね。私の呼吸や心音、何よりひとりよがりの魂胆はすべて見抜かれていた。文字通り、キミは、私の内なる人だったのだから。

季節は雪と花を混在しながら歩を進め、冬と春を織り交ぜる。その織りのなかに間をしのぼせるかのように甘い香りが散りばめられていく。閉じ込められた冬と、次の萌芽へ長い眠りを貯めた山全体を揺り動かす力なき力。包みこんだ瑞香を私のもとへ終雪が運ぶ。

くすぶつたい切ない騒めきがおこり、再会への道案内とともに
キミに会えようか

——その幽香の時じくで

時間の溝に落ち 中空にしじまが広がる

沈黙と沈黙

沈黙の静寂

香りだけがその気配を知る

無いけど有る 在るけど空い 花香とはふしぎな美

空は無ではなく

異世界未満の幽玄と

無限のときへと続くもの

雪は天からの文、

沈丁花は誘いの使者だった。

スカーフが風に流れ、冷たい頬をなで顔を上げる。ゆっくりと立ち上がる。
ここは標高千メートルの地。豊かに晴れ渡る空、その空へ返礼するかのよう
うに、時知らぬ山と群青色の湖が瑞光をたゆたえている。